

諸古典学の出会い

評価委員 高崎 直道
(鶴見大学学長)

特定領域研究「古典学の再構築」の最終年度を間もなく終えるに至り、評価委員の義務として一文をニュース・レターに載せるようにと仰せつかって、呻吟している。ひとつには勤務先の校務多忙を理由に、ほとんど協力の実を挙げえなかったことへの反省とお詫びである。かろうじて、唯一の貢献として、第五回シンポジウムに参加して、インド学の立場から基調講演を行ったことに、安堵（自己満足？）を見出せるだけである。

これは例えば、同じ評価委員のおひとりである藤澤令夫教授が、ほとんど毎回、シンポジウムに参画され、閉会の辞でその成果を手際よくまとめられるなどの著しい貢献をされているのには比すべくもなく、また上山春平教授がその諸古典学にわたる該博な知識と昔と変わらぬ強い好奇心に基づいて、各領域で現在第一線で活躍する研究者を相手に対談されたこと（これまで都合6回）については、ただただ敬服申し上げるほかない。（もっとも、先生はその対談を心から楽しんでおられたようであり、そのことがまた、相手から出すべきものを引き出し、対談の内容をすばらしい読物とし、それぞれの領域の研究の問題点を読者に知らせるのに、大いに役立ったと思われる。正直のところ、私が「古典学の再構築」ニュース・レターの中で、一番愛読したのが、この対談シリーズであった。）

もちろん、謝意は、本特定研究の組織から実行にわたる、すべての業務を遂行された代表者中谷英明教授をはじめとする実行委員会のメンバー各位にも捧げなければならない。

その5年にわたる研究の成果を、今後もつづけるべき「古典学の再構築」の第一段階として、高く評価したいと思うものである。

然らば具体的に、今回の研究の成果はどこにあったか。私は端的に言って、それは諸古典学の出会いということにあったと思う。従来の日本の研究体制、学会組織は、西洋・東洋・日本というタテ割り、その中

に古典研究から近現代研究というすべての時代を含む形で組織されていた。したがって、それぞれの領域の古典学者が一堂に会するという事は考えつかなかったのである。もっとも東洋学というのは、西洋から見て東方の諸文明の研究を一括して呼んだもので、古典研究という点では、イスラーム、インド、中国の三大文明と仏教文化、そして日本など周辺領域を含む大きな地域研究で、その諸文明・文化についての比較研究もすでに行われている。研究組織としては、1873年の第一回パリ会議にはじまる国際東洋学会議（International Congress of Orientalists）がある。会議はその後、研究領域・部門の拡大に伴い、名称を「国際アジア北アフリカ人文科学会議」（CISHAAN）を経て、「国際アジア北アフリカ研究会議」（ICANAS）と変えて現在に至っている。いわばそれは、西洋（欧米）とそれ以外の地域によって世界を二分するものである。日本は近代的学問体制の形成に当たって、その西洋式分類をそのまま採用し、ただ日本についてだけ、東洋の仲間から独立させたに過ぎない。（しかも、それは、やや悪いことに、日本研究を他の地域の研究から孤立させて、いたずらに特殊性を誇る傾向を生み出した。それが改革を余儀なくされたのは第二次世界大戦後である。）

ともあれ、西洋的観念と方法論に基づいて、日本では西洋文明の淵源としてのギリシャ・ローマ古典研究がはじまり、西洋以外の国としては高度の研究成果を挙げてきた。一方、東洋諸文明の研究では、近代以前の伝統的な学の体系（儒学や仏教の訓古註釈の学）に対し、近代的な、ヨーロッパ起原の方法論（言語学・文献学）による新研究が対立しながら、後者優勢の状況で今日に至っている。たとえば仏典の研究でも、漢訳仏典よりパーリ語や梵語の原典研究に重点をおき、第二次大戦後、梵語経典の新発見等も手伝い、欧米の学者に伍しての日本人学者の研究成果は飛躍的に増加した。中国学の領域では、日本文化が漢文の受容をとおして、その真っ只中にひたっていただけに、伝統的

学の上に新しい方法論を重ねることが可能となり、一時は日本の方が近代的研究で本家の中国に先んじる状況もあったと想像される。しかし、こうした伝統をもつ領域以外の、たとえばイスラーム研究に関しては、先端的な二・三の研究を除いては、その研究者層はまだ厚くないように見受けられる。

さて、以上のような、個別的な諸領域での古典研究が轡を並べてすすんでいる日本で、それらの諸領域を一望できる研究組織をつくらうとする動き、それも、西洋から東洋諸領域を眺めた場合のように、己を一步も二歩も優位に置くのではなく、あるいは東アジア文明の末端にあったものとして、これまで諸文明を受け入れて来たときはまた違って、諸文明領域の古典を、古典（これはそれぞれの領域ごとに意義づけは異なるが、ともあれ「古典」とみなされているもの）という同じ範疇で比較研究しようという動きが現れ、それを把えたということは時宜の当然であった。時宜とはいえ、それを把えるには見る目と行動力がある。実行委員の諸教授に重ねてその労を謝する次第である。

もう一つ、嬉しいことは、この日本で企画された諸古典学総合のシンポジウムに、西洋の各領域研究の代表格に当たる研究者たちの参加を得、それぞれが何がしかの形で在来の西洋を基本とする東洋古典研究に対する反省もこめて、これからの古典研究のあり方を語られたことである。その声を引き出し、きくことが出来たのは、やはり成果の一つと言ってよい。

では、出会った上で研究は何がなされるか。まず第一にそれは比較である。二つ以上の領域の古典が並べられれば、ひとつおのずから比較の意欲をもつであろう。自国と他国の文化の優劣などである。他の文化伝統だけを研究している場合でも、自国のそれとの比較は無意識にしているものである。しかし今回発表された諸研究では、これまでは見逃しがちであった比較の視点を意識的にとり込んで成果を挙げたものが見られた。自分の所属する研究領域を例として出すのは気が引けるが、例えば、後藤敏文「サッティヤとウーシア—インドの辿った道と辿らなかった道と—」ニューズ・レター、第9号（原綴等、表題の一部省略）は、その見事な研究成果の一つである。教授は英語のbe動詞に当たる印欧語共通祖語に由来するギリシャ語のウーシアとサンスクリット語のサッティヤを比較し、その共通の意味を確立すると同時に、それぞれの文化の中で担った役割の差異、それが近代に至るまでの西洋とインドの学問の発達に及ぼした影響をながめわたした、一種の比較文化論となっている。（インド思想

の中で、またヒンドゥーの伝統と仏教との共通点と分岐点も論ぜられている。これもまた、同じ文化伝統における異種の伝統の比較である。とくにインドの仏教を論ずる場合、忘れてはならない視点である。中谷英明「原始仏教の思想の解明—バラモン教聖典の同時的解明を通じて—」も、この種の比較の視点に立つ研究と思われる。）

インド学の場合、そのそもそもの成立が印欧語族という同一グループに西洋とインドが所属していることの発見から出発している。したがって、そこに明確な比較の基盤、共通性と差異性（普遍過性と特殊性）があつて、方法論が確立しやすい。しかし、そうした基盤（言語に限らず）が見付けにくい文明同士の場合にはどうなるか。一つには仏典のように、伝播した地域の言語に翻訳され、その地域文化の影響を受けながら、しかもインド以来の伝統を保っている場合、一方では古典の普遍性と解釈の個別性、他方では仏教を通じての諸文化の特色の比較（中村元『東洋人の思惟方法』）も可能となる。諸文明間の古典を通じての影響ということも、比較の視点からみて大事な研究課題となるであろう。（イスラーム〔アラブ〕を通じてのインド文化のヨーロッパへの伝播〔たとえばアラビア数字、ゼロの概念など〕）

今回の特定研究が目指している次段階（あるいは最終）の目標として、統一古典学の確立がある。この点については、私にはもう一つ明確なイメージが浮かばない。また、計画の一つとして、第17期日本学術会議に提案され、対外報告として採択・公表された「古典学研究所」設立構想がある。私の経験（第15期の「漢文資料館」構想）から言うと、この「対外報告」というのは、学会にそういう希望があることの報告だけで、その実現はおそらく期待しえない。それよりも、今回収められた諸古典学研究者が一堂に会しての研究会議という成果を生かすべく、古典学連合とでも名付くべき組織をつくるのが差当たって必要なのではないか。そうすれば、そこを母胎として、第二次の特定研究を計画することも出来るであろう。また、コンピューター利用の方式等についても、別の、あるいは連合の旗下での組織をつくる必要があるだろう。徳永宗雄教授によれば、近い将来、文字・文献はコンピューターにとって代られるということであり、古典学はインドのシュルティ、仏教の如是我聞の時代に立ち戻ることになるかも知れない、その新古典が人類の統一古典となるならば幸いである。